

仏教説話からみた蓮華座の成立と展開

杉 本 瑞 帆

1. 本研究の目的

今日われわれが目にする仏陀の図像では、多くの仏陀が蓮華上に坐立している。經典中でも特異性を認められるこの蓮華の座所は、どのようにして仏教經典中に用いられることになっていったのだろうか。

仏陀の座所は、簡潔な動作の描写から原始大乘を経て、蓮華を用いた神通力の可視化された発現の表現として発達した。仏陀の居られる地点の情景を示す仏座は、当時の仏教徒たちの文化や世界観が、柔軟に反映された部分である。このような仏陀像の輪郭部分の展開を考察することで、人々が受持した仏教の潮流を、より鮮明に描き出せると考える。

特に、釈尊が蓮華上に坐するという表現は、従来の研究が扱う仏典より更に古く、既に古訳に確認できる。それ故、本研究では、これら古訳と、同じ北伝に属する仏教説話を検討し、蓮華座の出現時期を、考古的資料及び訳経年から確定していく。そして、蓮華座の展開と発達を段階的に整理する。さらに、上述の結果を踏まえて、蓮華座に言及する諸資料を、内包する仏教思想の点から検討し、それら諸資料がどのように蓮華座を理解・活用していったのかを明らかにする。

2. 問題の所在

先行研究では、諸資料の中に蓮華座の記述が広範囲に現れるため、登場箇所と資料名を列挙することが殆どである。そのため、各文献資料の特徴や傾向、そして、資料間の繋がりや内包される仏教思想の発達、蓮華座が表わされる理由や役割を読み込んでいない点が問題といえよう。また、先行研究は、〈法華経〉〈華嚴経〉といった、大型に発達をした大乘經典単体を考察対象とする。しかし、それら大乘經典の原初期にみられる表現では、後に定着する「尊格の座」としての役割は希薄で、川や池などに蓮華が咲くといった、情景の一要素としての簡潔な意味

合いが強い。従って、「蓮華の座所」に言及する、原始・初期大乘經典を改めて比較考察すべきである。

また、多くの研究は『大智度論』に記される Mahābhārata の表現に依拠し、釈尊へのプラフマーのイメージ投影から、蓮華座の始原を論じているが、釈尊自身が蓮華から誕生したという仏伝の記述はない。この『大智度論』の一説を持って、釈尊の蓮華座に関して「蓮華生」から採用されたという仏教側からの証拠は希薄であり、新しい視座から再度考察されるべき点である。

3. 仏教經典中の蓮華の分類認識

仏典に現れる蓮について、植物学的な分類はすでに精緻になされている。漢訳においてはしばしば蓮と睡蓮が混同されるが、インドでは仏教徒は蓮を、その撥水の特性から区別していた。この蓮は、原始仏典 (Suttanipāta, Dhammapada など) において、しばしば「不着」の蓮華譬喩に散見される。水・泥に濡れない蓮と、欲望に汚れない聖者とを重ねるのである。もちろん、この譬喩は古ウパニシャッド、ジャイナ經典にも見られることから、インドの風土で共有された汎用的なイメージであった事が解る。

上述の蓮華の譬喩とは別に、仏典には、「火中に咲く蓮華」という表現がある。これには二通りの意味がある。一つ目は、偈頌にみられる「世間で稀有な存在」の譬喩。二つ目は、文字通り「火中の菩薩の足下に蓮華が咲くという奇跡」の描写である。両者はともに、主に北伝のジャータカなど、単独流布した仏教説話の中に見ることができる。

この表現を踏まえて、本研究では、仏菩薩の立勢と坐勢の蓮華座の源泉に言及する仏教説話を検討する。

4. 美術表現から見た蓮華座の萌芽

蓮華は、図像としては、前2世紀に初期仏教美術中に「蓮華の台」として登場し、女神、ヤクシャ、ヤクシー、ナーガを伴う仏陀の意匠にも現れる。まず、蓮の花托に合掌するヤクシャや、ガジャ・ラクシュミーが立つ浮彫の作例が、仏塔を廻る欄楯装飾に数点確認でき、仏教美術においては自然宗教的領域内での一表現として、描かれていたことが把握できる。次に、蓮華蔓草の上に仏陀の意匠が表現される作例がサーンチー第二塔塔門浮彫 (前3世紀)、パウニ出土の作例 (前1世紀) に確認できる。ここではまだ蓮華座ではなく、「蓮華上の方座」として表現される。「蓮華の座所」という図案が明確に示される最初の作例は、サーンチー第一塔塔門横梁浮彫 (1世紀) のガジャ・ラクシュミーである。

南インドに目を向けると、アマラーヴァティー及びナーガールジュナコーンダの作例 (2 -

3世紀)に、蓮華の花弁の上に仏塔を表す(「蓮華上の仏塔」)という表現が確認できる。この表現は、アマラーヴァティーの1世紀以前に属する作例や、同王朝下のカナガナハッリの作例には見られない。そうして、やや後のアマラーヴァティーに見られる仏像表現を採用した3世紀の作例(Knox, PL 72)によく「蓮華上の仏立像」が見いだされる。

このような蓮華座の「表現の転機」は、南インドの人物とされる龍樹(150-250年頃)が、サータヴァーハナ朝の王に宛てた書簡、Ratnāvali と『菩提資糧論』で、「仏像は蓮華の上に坐すように」と勧めることと時期的に一致する。ここから、南インドでは、イクシュヴァーク朝以降の仏立像を戴く蓮華座が、初期の蓮華座表現であることを指摘できる。それに先立ち、意匠表現としての「蓮華上の仏塔」が、2世紀以降に現れ始めることと、龍樹が活躍した年代が2世紀の後半であるという共通点から見て、南インドでは、蓮華上の仏陀は、「蓮華上の仏塔」で表されるという選択を経て、間もなく「蓮華上の仏立像」へ展開したと考えられる。

5. AG にみられる仏弟子の偈頌と「是第一の弟子」の仏弟子の記述の重要性

Anavatapta-gāthā (以下、AG とする) は、仏弟子たちが己の「是第一」の特能と、その過去世の因業を説く北伝の長老偈であり、仏陀の蓮華座の発達段階が把握できる序文が保有されている。主に用いる資料はガンダーラ語写本断片 AG-S (130-250年)、序文から弟子の章を経て、釈尊の章まで一連の構成が確認できる竺法護『仏五百弟子自説本起経』(以下、Dhr とする) (303年訳)、より発達して合理性を持つよう整えられた MSV である。

ここでは Salomon [2010] による研究を基底に、弟子の章で最初に位置するマハーカーシャパの章を復元・整理することによって、仏弟子の記述における AG 本来の序文相当部分の役割を再考する。とくに AG 資料中、確認できる限り最も早く蓮華の坐所に言及する Dhr は、古い序文も平行して保持しており、その蓮華座に到る段階を確認する資料として重要である。

6. AG の序文について

蓮華座に言及する AG の序文が確認できる資料は、Dhr および MSV である。ガンダーラ語写本には確認できないことから、本来存在したものではなく、弟子の章冒頭に付加されたものと考えられる。AG の全体が概観できる Dhr と MSV から、その構成は四つに大別できる。

- A. 序文
- B. シャーリプトラとマハーマウドガリヤーヤナのエピソード (MSV のみ)
- C. 弟子たちの過去世の告白「弟子の章」
- D. 釈尊の過去世の悪業の告白「釈尊の章」

アナヴァタプタ龍王が、釈尊一行に湖面に咲く蓮華上に坐るよう勧めると述べる Dhr の序

文は、龍王が釈尊と弟子たちに因縁を説く事を請う。これに対し MSV は、釈尊が過去世想起の行動を主導する記述となっている。さらに B の挿入と、「弟子の章」から、アナヴァタプタ大湖の地理的特徴を述べるマハーカーシャパの章冒頭箇所が抜き取られ、序文に吸収されるといった発達した形をもつ。

この序文に相当する、アナヴァタプタ大湖という特別な場所を意識した情景描写が、Dhr 中には三カ所存在している。これらは①A 五河の源を擁する無焚龍王の宮殿、②C 冒頭花々の咲く、ヤクシャの遊ぶ秘境へと神足で飛来する、③D 冒頭「龍王の阿耨達大池に在り」の記述である。これらを比較すると、AG 序文は以下のような発達を仮定できる。

マハーカーシャパの章冒頭 (C)



釈尊の章冒頭 (D)



AG (Dhr) 序文 (A)



マハーカーシャパの章冒頭の移動 (MSV)

最も古い写本 AG-S では、マハーカーシャパの章冒頭箇所、ヤクシャがおり花々の咲く、神足がなければ行くことができない場所という特別性が述べられるのみである。一方で、「釈尊の章」においては、龍の住むアナヴァタプタ大湖として具体的名称を固定され、おそらくこれは「弟子の章」と各々独立して、或いは二者が併存する形で伝えられた。この点は「釈尊の章」のみを伝える『興起行経』の流布から明らかである。両者が一綴りにされた後、Dhr にみられるような序文がマハーカーシャパの章より前に付加され、修正される事なく情景描写が重複し、時制や言動に矛盾をはらんだまま伝承される。ここで、湖に咲く蓮華上に坐り、自ら神通を示すという表現が始まる。続いて釈尊、弟子たち、龍王の言動に整合性をもたせるため、マハーカーシャパの章冒頭が分断され MSV 序文へ整えられた。蓮華が湖水の情景ではなく、釈尊の神通を示すという願いを察して龍王が化出した特別な座所となり、釈尊の行動が受動的に説明付けられるようになった。

神通を示すため、ヤクシャの遊ぶ花咲く秘境へ行く



神通を示すため龍王の居るアナヴァタプタ大湖へ行く



アナヴァタプタ大湖で神通を示すため龍王が蓮華上の座所を勧める



アナヴァタプタ大湖で神通を示すため二龍王が蓮華座を創出する

7. 「舎衛城の神変」の蓮華座

「蓮華座」の発達過程に対する先行研究において頻繁に言及されるのが、「舎衛城の神変」の説話である。「舎衛城の神変」説話を掲載する資料として、18の仏典が確認できる。先行研究では、特に Divyāvadāna（以下、Divy とする）の「舎衛城の神変」に焦点が当てられてきたが、『義足経』（223-253年訳）や『法句譬喻经』（290-300年訳）などの古訳や、比較的成立の古い資料は、検討対象としてあまり注目されてはこなかった。本章では、それらの資料を検討し、仏教が「蓮華座」を「仏陀の座所」へと展開させた時期を探った。そこで、『義足経』と『法句譬喻经』を中心に再検討を行った結果、「舎衛城の神変」説話は以下の三グループに分けられた。

〈S-A グループ〉神通を安易に使うことが禁じられた話。マンゴー樹が急成長する神変、双神変などが示され、外道の死に言及する。「放光」と蓮華の座所は登場しない。

〈S-B グループ〉「放光」「水火の神変」「多仏化現」を主とする。神通禁止の事件と、マンゴー樹の神変の二点は見られない。『法句譬喻经』を除き、蓮華の座所が登場する。

〈S-C グループ〉簡潔な描写に留まっており、神変の事象のみを述べる。蓮華の座所は登場しない。

S-B グループの内、『義足経』と『法句譬喻经』の説話構成、登場人物がよく一致することに着目し、神変の表現を比較した。『義足経』は蓮華の湧出が説かれ、これが同説話中で最も古い「蓮華の座所」の一段階前に位置する表現と思われる。同経は有部系の Suttanipāta の「義品」、または有部の伝承に近似する背景を持っていた経典と推定される。これに対して、『法句譬喻经』の原典は、パーリまたはプラークリット系であったとされ、物語も比較的 S-A グループに近い要素を持っている。この二経における「舎衛城の神変」説話は、それぞれ結びの偈頌においての主題を異にするが、その応用に耐える浮動的な説話であったことが判る。また、「舎衛城の神変」が示す「蓮華の座所」は、説一切有部と近い関係にある伝承の中で現れ、Divy などのアヴァダーナ中で発展を見せたことも指摘できる。

『義足経』の蓮華湧出が、Divy のような蓮華座に至った理由として、二つの行程が指摘できる。一つ目は Divy の神変場面と類似し、ナンダとウパナンダの二龍王による蓮華化作表現が、AG-MSV にもみられる点から理解できる。舎衛城で神通を示す事と、アナヴァタプタ大湖で過去世想起の神通を示す事は、仏陀の十事として有部において重要なエピソードであったため、

発達した AG の表現に影響されたといえるだろう。二つ目は蓮華座からの多仏化現であり、先行研究が用いた〈華嚴經〉にその源流をたどる事ができる。

まず、坂本 [1956] による研究から〈華嚴經〉の核は、『兜沙經』(146-189年訳)、『菩薩本業經』(223-253年訳)、『諸菩薩求仏本業經』(280-312年訳)、『菩薩十住行道品』(291-299年訳)中の各品該当部分を接ぎ合わせる事で再現できる。さらに大竹 [2007] は『兜沙經』経題の音写「兜沙」が avataṃsaka の俗語形であり、經典本来の名前は Buddhāvataṃsakasūtra と推定できると指摘している。原始華嚴經に位置する『兜沙經』『菩薩本業經』では①仏陀の座処を「宝蓮華上の師子座」、②他國国土から来訪した菩薩の座処を「蓮華の上」と二種類示されているが、蓮華座とは明言されない。この点に加えて二經は③蓮華を用いない多仏化現(avataṃsaka)を作り出したという表現がみられる。

桜部 [1969]、大竹 [2007] は〈華嚴經〉の蓮華座を伴う Buddhāvataṃsaka (仏華嚴) が「舍衛城の神変」を説くアヴァダーナや仏伝文学と緊密な関係である事を指摘する。比較に用いられた蓮華座を伴う Buddhāvataṃsaka が含まれる「賢首品」(Bhadrāsri) よりも、『義足經』の訳出がより古く、大乘經典に描かれる蓮華座を伴う Buddhāvataṃsaka に先行したと見てよいであろう。逆に「舍衛城の神変」S-B グループは、その訳出年代から、原始華嚴經の流れをくむ蓮華を用いない Buddhāvataṃsaka の表現を取り入れたものであり、その後の大本『華嚴經』の蓮華座を用いた Buddhāvataṃsaka は、逆に発達した「舍衛城の神変」表現を取り込んだものといえよう。

本章では〈華嚴經〉における蓮華座表現が「舍衛城の神変」の影響下にある一方で、同説話の神変の原型といえる①②③の三点が原始華嚴經の中に表わされつつも、蓮華上の化仏湧出して連動していないという問題が提示された。次章で、この点について考察する。

8. 化仏・放光と文殊菩薩の蓮華座

『義足經』と『法句譬喻經』の一連の神変では「放光」が化仏・蓮華湧出の前段階に示され、化仏湧出が蓮華座と結びつく過程には「放光」が接点となっていることが指摘できる。ここで、梶山 [2012] によって「大品般若經の神変」に挙げられる尊格の「放光」を起点に出現する蓮華座と類似した表現が、『阿闍世王經』(以下、『阿闍世』とする)(178-189年訳)にみられる点に着目した。

この『阿闍世』は、文殊師利が「放光」を伴う蓮華座を湧出する。この文殊師利の基礎的な研究として平川 [1970] は、修行者としてのイメージを指摘し、氏家 [1976] は弁才に巧みな菩薩であることに注目する。本章では、五島 [2015] による梵天サナンクマーラのエピソードの「美しい声 (mañjusvara)」「神変」、西野 [2015] の指摘する東方世界も重要な要素として

考察する。

文殊師利 (Mañjuśrī-kumārabhūta) の呼称は、kumārabhūta の訳語から童真、童子と理解される。kumārabhūta とは出家者・禁欲者であると詳述されるのが大品系般若経である。この童真、童子も竺法護訳以降にみられることから、後代に付与されたイメージである。しかし、般若経と異なる十地を説く『菩薩本業経』の童真では、後述する『阿闍世』の文殊師利による神変周辺の行動に一致する特徴を説く。

文殊師利の性格は、より遡る Mahāvastu や原始般若経では全く示されておらず、『兜沙経』や『菩薩本業経』の中の世界観と、本業十地の第八地によって根幹の肉づけがなされ、そこから童真という呼称が付与され、それを受けて大品系般若経の第八地の性質を受け継いだことが理解できる。原始仏教において kumārabhūta が純潔な若者を示すのみであったが、初期大乘経典では文殊師利の形容詞として用いられていることから、文殊師利の性格は大乘の発達に誘引されるように、原始華嚴経の中で結びつけられた可能性が高いといえよう。そしてまた、〈般若経〉の系統と〈華嚴経〉の系統が接触し、相互に影響を与えていたことも示している。

このように従來說かれていた大品系般若経よりも、〈華嚴経〉の系統に文殊師利のイメージ源泉の端緒が見える。それは、他方仏国土の菩薩としての文殊師利を東方の菩薩の上首とする経典に多いことが確認できた。

9. 『阿闍世王経』の「文殊師利の神変」

宮崎 [2012] によると、『阿闍世』は第五章から第十章がまず先にまとめられ核となり、次いで第三章と第四章はそれぞれ他より移入されたものと考察される。「文殊師利の神変」はこの第三章に相当する。下方仏国土へと投げられた鉢に文殊師利が手を伸ばすと、毛穴から光明が出で、光明には蓮華があり、蓮華には化菩薩があって、化菩薩が他方仏国土の仏に挨拶をするという神変周辺の出来事である。これを梶山 [2012] による神変の分類を参考に区分し考察する。その結果、「文殊師利の神変」は、東方からの菩薩の来訪、三昧、放光、悪趣から善趣へ、相互照見、シャバの莊嚴を核たる部分に保有し、これに第三章で他力による救済、無上正等覚、化身湧出が追加されたものである事が明らかとなった。

続けて、「文殊師利の神変」中の蓮華からの化身湧出に注目する。ここでは、下記のようにシャバから他方仏国土への拡声のかたちを、イメージしやすく表現している。

シャバ〈化主→光明→蓮華→化身→音声〉他方仏国土

ただし、『般舟三昧経』、『道行般若経』には既に口中光明という表現が確認できることから、光明＝特別な音声というイメージは先だって完成していたことが解る。遅れて「文殊師利の神変」で蓮華と、光明＝特別な音声が結びつけられた背景については、『阿闍世』の核となった

層に含まれる第八章の末尾に述べられる、羅毘拘速三昧に見いだせる。この花を意味する拘速 (kusma) を、より具体的にして第三章では蓮華を採用したものと思われる。

では、文殊師利が本来可能であった神変とは何か。原始仏教における神変・神通とは「行くこと」(gamana) と「化作」(nirmāṇa) である。「行くこと」は、自由に仏国土間を往来している描写から、「化作」は三昧の力によって化菩薩が生じる描写から確認できる。

「行くこと」に関しては原始華嚴経、『阿闍世』の古層の両者において文殊師利は、神通を行使し、東方の仏国土からシャバへと来訪している。また、「化作」に関しては、文殊師利の特別な能力として既に原始華嚴経において勝れた弁才が示されており、この能力から、複数の他方仏国土への発声のための化身湧出が『阿闍世』の核となる層の第九章で付加されたことが解る。

原始華嚴経の、化身が他仏国土に現出するという神通を基幹に、文殊師利の弁才の能力をより身近な具象でイメージできるよう工夫されたものが、「文殊師利の神変」である。このような蓮華座の成立時期は、大品系の創出された100年頃を上限に、『阿闍世』訳出時の180年頃までに、化身の座処として蓮華座が採用されたとみてよいであろう。

文殊師利と kumārabhūta が、厳格な修行者のイメージとして結びついたのは、大品系般若経の影響下であり、本来は弁才、智慧、光明、神足といった特質を持っていたと思われる。それらは、原始華嚴経や『阿闍世』などを土台に培われたイメージである。この点から、「大品般若経の神変」が「文殊師利の神変」と接触を持ち、その蓮華座湧出表現を共有した可能性が示唆される。

蓮華から湧出する化菩薩は、文殊師利の弁才と光明を用いて、他仏国土への影響・拡声を具象的に描き出したものであり、「舎衛城の神変」の蓮華上の化仏湧出の原型をここに見いだせる。この第三章は同一原泉を持つ『放鉢経』(266-316年訳) の存在から、単独流布經典であったことが明らかである。蓮華座には AG 序文や、アヴァダーナが伝えた「舎衛城の神変」説話、『阿闍世』第三章といった単独流布した經典中での誕生と発達が顕著であることが証明できた。

これらの点から、神足、化身湧出と言った神通の力の具象表現が蓮華であり、蓮華座に坐するという表現は、主尊がその力の発生源であることを示す情景であることが明らかとなった。

10. 浄土經典の蓮華座

本章では、浄土經典で、阿弥陀仏が菩薩・阿羅漢たちとともに蓮華上に坐ったという記述に着目した。浄土に言及する經典は非常に多岐多数であるため、一經典としては資料が豊富な〈無量寿経〉に、どのような蓮華の坐所に関する表現の傾向があるのか、前章で扱った神通との親近性を考察する。

〈無量寿経〉で古い形を保持する『大阿弥陀経』と『平等覚経』の初期無量寿経からは、二つの蓮華の坐所が確認できた。共に、阿弥陀仏国土における蓮華の坐所であり、一つ目は【無①】七宝の水浴池で水浴したのちに阿弥陀仏、菩薩、阿羅漢たちが坐る大蓮華。二つ目は【無②】阿弥陀仏国に往生した諸天、人民、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、水浴池の大集会において、大蓮華の上に坐って前世想起をするというものである。

【無①】はAGの原初的な世界観と同様に、阿弥陀仏国を神通で到ることのできる、蓮の花の咲く池をもつ舞台に選んでいる。特別な性質や描写を用いていない、簡潔なものである。一方で、【無②】は明らかにAGのような特別な蓮池での大集会と神通の発現という条件に従った情景描写を知っている。さらに、そこには仏弟子から拡大された悟りの多彩な個性の存在に言及されており、【無②】は【無①】より発達した思想背景を持つものであるといえよう。

11. 乗り物の蓮華座

『阿闍世』のように、文殊師利が蓮華座と密接な関わりを見せるのが〈法華経〉と『弘道廣顯三昧経』（以下、『弘道廣顯』とする）である。ここでは、蓮華座が単独流布經典で発達を見せたことをさらに補強するため、やや発達した蓮華座の展開を追っていく。

〈法華経〉は、先行研究の多くが〈法華経〉「提婆達多品」は後代の付加であるという見解である。明確な蓮華座は唯一、この「提婆達多品」とそれを保有する『薩曇分陀利経』に確認できる。

〈法華経〉における蓮華座の特徴は、菩薩の移動する乗り物として扱われている点である。また、その蓮華座は、下方「サーガラ龍王の宮殿より自然に涌出した」と示されている。塚本[1980]は〈法華経〉の龍女成仏と『海龍王経』『女寶錦受決品』との比較から、『薩曇分陀利経』と「提婆達多品」が一歩進んだ形と指摘する。しかし、『海龍王経』には文殊師利とサーガラ龍王のような結びつきは見られず、加えて、蓮華座も現れないことから、〈法華経〉の蓮華座は独立流布した「提婆達多品」相当部分で、文殊師利に伴われて誕生したといえるだろう。蓮華座の展開としては、原始華嚴経や『阿闍世』からは遅れる伝承であったと理解できる。

〈法華経〉で、文殊師利が蓮華座とともに登場する菩薩の集会と同様の情景を持つ『弘道廣顯』は、経録と内容から『阿耨達龍王経』という経題であり、般若系のものであるのは明らかである。本経は、今までの蓮華座の形成に関する考察で用いた、AGと『阿闍世』、〈法華経〉を結ぶ世界観を持っている。ここでも、蓮華座は、移動時の乗り物という神足通の可視化された表現である。また、「文殊師利の神変」の化仏による拡声を用いた挨拶といった、特徴的表現も保持している。

『弘道廣顯』は、〈法華経〉の文殊師利の蓮華座と、AGの地理的条件や場面設定、『阿闍世』

の花による拡声を混成したもので、より遅れたものである。しかし、これらの伝承が多種の大乗経典と交雑することを受容しつつ、新しい経典を作成するゆるやかな環境があったことを示している。

12. 火中の蓮華

足下の蓮華もまた、北伝の単独流布経典にその成立と展開を見出すことができる。J. No.40「カディランガーラ・ジャータカ」（以下、「カディラ」とする）では、菩薩を害する火災から、蓮華がその命を救う。この「長者の施食」説話の劇的場面で登場する火中の蓮華の描写は、過去世において菩薩である長者が施食者の南伝系統と、現在世において異教徒の長者シュリーグプタが施食者である北伝系統が有る。北伝系統は『大莊嚴論經』（以下、『莊嚴』とする）など11経である。この物語は、ガンダーラ出土の仏塔基壇装飾レリーフ断片（2－3世紀）に確認できる。

南伝と北伝の二系統の物語では、カディラの木の炭を燃やした深大な火坑という殺傷を目的とした罟と、そこに踏み込む者が蓮華によって死を免れるという表現が共通して表されている。登場人物は過去世と現在世の時間軸をずらす形で置き換えられ、おそらく北伝系資料は「カディラ」を元に、説話中の複数要素が仏伝へと再構成されたものと思われる。

その内の『莊嚴』は、有部律にみられる複数の説話をあげており、作者が有部系の知識を有する人物であったことが伺える。成立時期と美術作例との一致点から、おそらく北伝では『莊嚴』がオリジナルに近い形を保持していると思われる。

物語の主役であるシュリーグプタは、どの経においても外道の一派で、釈尊に害意をもっていった点は共通している。アビダルマ論書では、「悪業を行った者でもなぜ菩提果を得たのか？」という問いの答えに、該当する稀有な者として記される。この表現は『維摩経』「仏道品」にも、稀有な菩薩を「火中蓮華」へ喩える偈が確認できる。「カディラ」における火中の蓮華場面は、大乘経典へと用いられ、害意・悪魔をはねのける菩薩と、その稀少性をたたえる譬喩となった。

北伝の「長者の施食」説話とは、有部の知識を持つ者によって創作された、釈尊の事績を物語る新しい説話であり、主にガンダーラ地方で単独流布していたとみられる。それは「カディラ」と共通する素材を有しており、おそらくはジャータカから二次的に生み出されたものであろう。足下の蓮華とは、座処の蓮華とまた異なる道程から生まれた奇跡の力の具象表現であり、向けられた害悪を封じる特質を持っていることが解る。

13. 結論

前3世紀の初期仏教美術から、釈尊の座処としての蓮華座の展開を見ると、次のようになる。まず、「蓮華上に坐す」というイメージは、既にインドにおける民族的造形表現に保有されていた。仏典においては、原始華嚴経の表現からは、釈尊の座処としての蓮華座という意識は希薄であったといえよう。しかし、2世紀半ばに遡りうるAGにおいて変化が現れる。AGでは、仏菩薩達が「神通を用いて至る場所」、「神通を現す場所」の特徴として蓮華が表される。この物語における蓮華は、龍王が登場し、座処に言及するDhrのような、AGのより発展的と思われるバージョンで蓮華座へと発達した。そして、説一切有部の律に保有されるように、釈尊が神通を示す特別な地点としての蓮華座が認められていったといえよう。

これに対して、仏菩薩が現出する化身の座処となる般若経系統の蓮華座がある。こちらは原始華嚴経と同じ化身湧出の神変を示す『阿闍世』の中で、放光によって現出する蓮華座に始まる。『阿闍世』の核となった部分には、文殊師利菩薩が、「光の花」という名の三昧に入り、放光の神変を行う箇所が存在する。文殊師利が化身を湧出するこの「光の花」は、後の段階における「蓮華座」の原型となったと考えられる。なぜなら『阿闍世』における後代の移入部分や、大品系般若経には、「光の花」を「蓮華」と替え、他仏国土へ到達する「蓮華座」を生じる放光の神変を、仏菩薩が行ったとする記述が見られるからである。

これと同じ般若経系統の、「放光による蓮華座」から影響を受けたと考えられる説話が「舎衛城の神変」である。『義足経』の「舎衛城の神変」よりも発達した形の、釈尊が現出させる「放光による蓮華座」を起点とする「仏華嚴 (buddhāvataṃsaka)」は、後の大本『華嚴経』に確認できる。

このように、AGに見られる「蓮華座」の系統と、般若経系統に源泉をもつ「蓮華座」の事例が大きな流れであることがいえよう。これら両者の系統を保持する資料が、根本説一切有部律であり、前者は『薬事』に、後者は『雜事』に含まれる。この両系統は、仏陀の十事に挙げられる二つの事件であり、仏菩薩のために「蓮華座」を現出させた二名の龍王の名前が共通している。ここから、有部の伝承において「舎衛城の神変」と、AGの要素が合流している点が確認できる。

また、従来、「蓮華座」に対する研究は、華嚴経、法華経、そして浄土経典それぞれの発達した段階のものを対象としていた。しかし、その前段階となる「蓮華座」には、次のような影響関係が見出せる。

初期無量寿経の「蓮華上に坐す」記述からは、情景描写にとどまる、簡易な表現の段階と、AGと同様に神足を現す事を条件に、前世想起を行う場所を示す表現が確認できた。また、〈法

華経〉の蓮華座表現からは、「特別な場所への移動の手段」として蓮華座が意識されており、神足と蓮華座の密接な関係が見いだせる。やや遅れる『弘道廣顯』は、〈法華経〉と般若経系統、および AG を結ぶ經典であり、やはり神通発現で蓮華座が描かれている。これらの点から、AG 序文で示される「神足で特別な場所に到る」「蓮華上で神通を現す」という世界観は、同時代に流布した大乘經典の初期段階や、単独流布經典において受容されていたことが確認できた。

これらと発達を異にする足下の蓮華座表現であるが、やはり北伝の単独流布經典に見いだせる。これは「長者の施食」説話に由来しており、『莊嚴』から、説一切有部系の知識人によって新しい仏伝説話として受持された可能性が高い。經典の成立時期と美術資料から、2 世紀－3 世紀頃にはガンダーラ地方で用いられた蓮華座の表現であった事が証明されている。

以上の考察結果から、釈尊の座処となる直前までの初期蓮華座の出現時期は、次のようにしはる事ができる。130 年頃に遡りうる AG-S では確認できないが、Dhr では釈尊が蓮華上に坐する事が明言されている点から、130－303 年の間に釈尊の座処となる蓮華の役割が確立された事がわかる。さらに、化仏ではあるが釈尊が蓮華座と結びついたのは、100－200 年頃成立とされる大品系般若経の段階であるといえる。また、般若経の系統から影響を受けたと思われる「舍衛城の神変」で、223－253 年の訳出である『義足経』において釈尊の神通による蓮華の出現という表現段階に到っている。この点から、化身湧出を伴う蓮華座については、2 世紀初めから 3 世紀半ば頃に釈尊と蓮華座が結びついたものと推定できる。そして、龍樹の Ratnāvalī での蓮華上の仏への言及と、南インドにみられる、蓮華上の仏塔浮彫表現を踏まえると、150 年頃以降には釈尊の座処としての蓮華座が、仏教徒間において認識されていたとみてよいであろう。以上の点から、130－150 年頃には仏座としての蓮華座が生まれていたと結論づけたい。

蓮華の座処は大乘が誕生した直後の時代に、仏教がもつ世界観中に特殊な場所の一描写として現れたものである。それが釈尊の蓮華座となるまでは、単独流布經典を始め様々な要素を吸収しつつ、数百年をかけて段階的に発達をしたといえるだろう。

本研究から、蓮華座には新たに特質として、神通との関わりが明らかとなった。蓮華座の発現は、神足で到る神通を示す場所の条件と、特別な力の具象的表現の二者に起因している。しかしながら、この二者は終止完全に分離した流れを保っていた訳ではなく、両者は仏教説話の発達に伴い、龍王の化作する釈尊の神通の場所である蓮華座として完成するのである。

この発達を追うと、その思想には出家者の殊勝性を保つ一方で、在家者にも歩み寄りを見せる姿勢と、そのために錯誤された工夫の揺らぎが、複数の大乘經典にまたがって見えてくる。蓮華座とは、このような思想の流れが生まれつつある緩やかな時代に、創出されたものといえるだろう。

参考文献

Foucher, Alfred

[1917] "The Grand Miracle at Śrāvastī," *The Beginnings of Buddhist Art*, Paris-London, pp. 147–184.

Knox, Robert

[1992] *Amaravati : Buddhist sculpture from the Great Stūpa*, London: Published for the Trustees of the British Museum by British Museum Press.

Otake, Susumu

[2007] "On the Origin and Early Development of the Buddhāvataṃsaka-sūtra," *Reflecting mirrors : perspectives on Huayan Buddhism*, edited by Imre Hamar. Harrassowitz, Asiatische Forschungen : Monographienreihe zur Geschichte, Kultur und Sprache der Völker Ost- und Zentralasiens ; Bd. 151. pp. 87–107.

Salomon, Richard

[2008] *Two Gāndhārī manuscripts of the Songs of Lake Anavatapta (Anavatapta-gāthā) : British Library Kharoṣṭhī fragment 1 and Senior Scroll 14*, Gandhāran Buddhist texts ; v. 5, University of Washington Press.

Syed, Renate

[1992] *Die Flora Altindiens in Literatur und Kunst*, Doktorgrades der Philosophie Universität München 1990, Unveränderter Nachdruck.

梶山雄一：吹田隆道編

[2012] 「神変と仏陀観・宇宙論」『梶山雄一著作集；第3巻』所収、東京：春秋社

坂本幸男

[1956] 『華嚴教學の研究』京都：平樂寺書店

桜都建

[1969] 「華嚴という語について」『大谷学報』49巻1号、pp. 26–34.

杉本瑞帆

[2014] 「火中の蓮華」『龍谷大学佛教学研究室年報』18号、pp. 118–101.

[2016a] 「Anavatapta-gāthāの序文について」『印度學佛教学研究』64巻2号、pp. 838–835.

[2016b] 「Anavatapta-gāthāにみられる仏弟子の偈頌と「是第一の弟子」の仏弟子伝承」『龍谷大学佛教学研究室年報』20号、pp. 13–48.

[2017] 「仏教經典における蓮華座の展開—「舎衛城の神変」を起源として—」『龍谷大学佛教学研究室年報』21号、pp. 1–20.

塚本啓祥

[1970] 「提婆品の成立と背景」『法華經の成立と展開：法華經研究3』pp.165–220.

[1980] 「蓮華生・蓮華座の源流と展開」『法華經の思想と基盤：法華經研究』8巻、pp. 43–87.

Bunchird, Chaowarithereonglith

[2007] 『原始仏教における佛弟子伝承の発達—AṅguttaranikāyaのEtadaggavaggaを中心として—』博士学位請求論文（大谷大学）

南清隆

[1986] 「『義足經』とAṭṭhakavagga—因縁講の対照を中心に—」『仏教史学研究』29巻1号、pp. 1–16.

宮崎展昌

[2012]『阿闍世王経の研究：その編纂過程の解明を中心として』インド学仏教学叢書編集委員会、
(Bibliotheca Indologica et Buddhologica ; 15)

八尾史

[2013]『根本説一切有部律業事』東京：連合出版

安田治樹

[2005]「ガンダーラ仏と蓮華座」『法華文化研究』31号、立正大学、pp. 1-23.